

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	現代世界における解放の神学の役割 : レオナルド・ボフの貢献
Author(s)	山田, 経三
Journal	社会正義 紀要
Issue Date	1992-03-31
Type	departmental bulletin paper
Text Version	publisher
URL	http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000006784
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

現代世界における解放の神学の役割

——レオナルド・ボフの貢献——

山 田 經 三

目 次

- はじめに
- I. レオナルド・ボフの経歴
- II. ブラジルの現状
- III. 解放の神学の背景
- IV. ラテンアメリカにおける解放の神学の貢献
- V. レオナルド・ボフの業績
- VI. 筆者の、解放の神学との出会い
- VII. レオナルド・ボフの苦悩と評価
- おわりに

はじめに

ラテンアメリカをはじめとする第三世界民衆が、人権、人間の尊厳、正義に基づく真の解放、民主主義を実現するために、思想的裏づけを与え、民衆の解放運動を支え、力づける大きな役割を果たしているのが解放の神学である。

その体系的理論づけは、1968年グスタボ・グティエレス (Gustavo Gutiérrez) による『解放の神学』(邦訳, 1985年, 岩波現代選書, 関望・山田経三訳) にはじまる。ところで, G.グティエレス師については別の機会(拙稿「解放の神学—グスタボ・グティエレスの著書をふまえて」, 『社会正義』紀要4, 1985年, 81-95頁)に既に詳しく紹介した。同師は1985年, 上智大学社会正義研究所, 日本YMCA 同盟共催の国際シンポジウム『解放の神学』の基調講演者として来日した(G.グティエレス, A.マタイス共編『国際シンポジウム 解放の神学』明石書店, 1986年, 他に拙訳『ヨブ記』教文館, 1990年参照)。

ジョン・ソブリノ (Jon Sobrino) 師(イエズス会神父)についても既に紹介

した。1987年、上記研究所、国際基督教大学社会科学研究所共催の国際シンポジウム『万人に経済正義を』の基調講演者として来日した(磯村尚徳、A.マタイス共編『今こそ経済正義を』みくに書房、1988年、他に拙訳『エルサルバドルの殉教者—ラテン・アメリカ変革の解放の神学』柘植書房、1992年参照)。

そこで今回は、主にレオナルド・ボフ (Leonardo Boff) を紹介することとする。

I. レオナルド・ボフの経歴

レオナルド・ボフは1938年12月14日、南ブラジル、サンタカタリナ州の小さな町コンコルディアのイタリア系の家庭に生まれた。フランシスコ会に入会後、彼は哲学と神学を、今、彼が教えているリオデジャネイロ州ペトロポリスの神学校で勉強した。1964年、司祭叙階のあとで、彼はドイツ、ヴュルツブルク大学、ベルギー、ルーヴァンのカトリック大学、イギリス、オックスフォード大学で神学の上級コースに在籍した。1965年から1970年まで彼は、ミュンヘン大学で著名なカトリック神学者カール・ラーナー (Karl Rahner) のもとで勉強、1972年に博士号を取得した。

ボフの博士論文は、教会の秘跡性についてである。この論文の主旨は、「第二バチカン公会議の公式文書にあるように、叙階された司祭だけでなく、洗礼を受けたすべての信徒は、聖霊によって塗油されたことによって霊的家族に迎えられ、そして聖なる司祭職に聖別される。そして彼らすべての人びとは、物質あるいは現世の次元の中でふさわしいキリスト教徒として働くことを通じて、闇の中から彼らを呼び出した主キリストの力を述べ伝えることができる」というものである。

論文を完成させたのち、ボフはリオデジャネイロの町から西へ40マイル離れたペトロポリス哲学・神学研究所・神学校の教授陣に加わり、以後、今日に至るまで同所に在住、教鞭をとっている。指導、教育と著作に加えて、彼はブラジル教会雑誌『ブラジリアン・エクレシアスティカル・レビュー』 (Brazilian Ecclesiastical Review) の編集者となり、『ブラジル神学紀要』 (Theological Journal in Brazil)、『コンキリウム』 (Concilium) のポルトガル語版の中心人物でもある。

II. ブラジルの現状

ボフの故郷ブラジルは、世界で最も多くのカトリック信者、1億950万4,000人をおかえ、また人口の大多数90.1%が小作人、インディオ、そして都市の貧しい人びとで構成されている。神学の分野では多作の著者である修道司祭ボフは、1970年代に特に「解放者としてのキリスト論」の研究に対して高い学問的評価を得ている。

ところが、ボフは国際的にはほとんど知られていなかった。1984年、バチカン教理省が解放の神学について消極的見解を表明しはじめるが、その過程において、やがてボフを標的とし、ついにバチカンで審問し、彼に対して1年間著作活動を禁止するに至った。ここに至って一躍ボフは世界的に有名になった。

バチカン教理省が標的にしたのは彼の著作『教会・カリスマと権力』(*Church, Charism and Power*)であった。これはポルトガル語から英語に翻訳されている7冊目の著書である。この著書の中でボフは、教会制度のエリート主義的ヒエラルキー構造を批判した。バチカン教理省が彼を標的とし、非難したことによって逆にボフは、数百万人にもものぼるブラジル教会の草の根の信徒たちに英雄視され、彼の著書はかえって世界的な評価を得る結果となった。

ブラジルのカトリック教会のうち、特に社会的に積極的に取り組んでいる人びとは、7万以上を越える草の根的団体、キリスト教基礎共同体(BCC: Basic Christian Community)を構成する運動を拓いている。この運動は、ブラジル司教団の認可を得ている。しかし、ボフが属しているリオデジャネイロ教区の非常に保守的な大司教エウジェニオ・サレス(Eugenio Sales)枢機卿は、この運動に対していくつかの問題点を指摘している。

III. 解放の神学の背景

昨年(1991年)は社会回勅『レールム・ノヴァルム(労働者の境遇)』発布百周年を祝う年であった。教皇レオ13世はこの回勅の中で、マルクス主義社会主義を拒絶したが、同時に資本主義をも非難した。そして1931年発布の回勅『クアドラジェジモ・アンノ』の中で、教皇ピオ11世も社会的不正

を非難し、拒絶すると同時に積極的に「カトリック・アクション」を促進した。

これら諸回勅は既に、解放の神学を予期させるものである。しかし、世界のカトリック司教たちが参集し、教会の歴史に新しい時代を開いた画期的な第二バチカン公会議までは、解放の神学は、教会の中ではさほど注目されることのない一見解に留まっていた。公会議は、1962年教皇ヨハネ 23 世によって招集されたが、その意図は教会の刷新と現代社会の中における教会の位置づけ(アジョルナメント)を再確認することであった。公会議が終って2年後の1967年、教皇パウロ 6 世は回勅『ポプロールム・プログレシオ (諸民族の進歩)』を公布し、特に第三世界諸国に与える資本主義の弊害を鋭く非難した。

第二バチカン公会議の決定を、ラテンアメリカ大陸の、構造的・社会経済的不正による諸問題の解決のために適用し、正義を促進し、人権を擁護するために、ラテンアメリカの司教団は、1968年コロンビアのメデジンで会議を行なった。マルクス主義に対する注意喚起もその一項目ではあったが、司教団はそれ以上に強く、自由主義的資本主義、とりわけ名指しこそしなかったが、米国による搾取を標的とし、非難した。特に司教団は、ピオ 11 世とパウロ 6 世両教皇によって厳しく非難された「国際的帝国主義的な資本」と経済的独裁政治へと導く、無制限な利潤追求主義によって支配される「権力」と「従属」とを、厳しく拒絶した。

しかも、この点つまり、帝国主義・植民地主義による誤った「開発」による「搾取」と「従属」は現教皇のヨハネ・パウロ 2 世の回勅『真の開発とは』(1987年)と新回勅『新しい課題』(1991年)によっても、改めて厳しく批判されていることをつけ加える。

ラテンアメリカ司教団によって採択された議案の一つは「真の正義の実現をめざして、社会変革を追求している人びと自らがつくりあげ、促進している草の根組織、BCC の運動を力づけ、支援すること」である。とりわけ、司教団は、キリスト教信徒たちの信仰を深め、強め、そして社会、経済の真の発展のために献身する「キリスト教基礎共同体：BCC」を正式に承認した。

IV. ラテンアメリカにおける解放の神学の貢献

1970年代と1980年代に入ると、レオナルド・ボフはしばしばブラジル全土、そして他のラテンアメリカ諸国を訪れた。キリスト教基礎共同体(BCC)を訪問することは、以前は支配者階級の側に身をおいていたカトリック教会を変革するための力となった。

かつては、政治・社会問題に積極的に取り組んでいた「社会派」といわれる行動的なグループや指導者たちは、ラテンアメリカ教会の指導者からは「反逆者」とみなされていた。ところが、第二バチカン公会議後、ラテンアメリカの司祭たちが、教会の最大の関心事を「特に抑圧されている、貧しい人びと、弱い立場に追いやられている人びとすべてを最優先して選択する」ことに置くように方向転換したことは、ボフの解放思想の発展に大きな影響をもたらした。ボフは、これらのグループや指導者たちを訪れ、接触することによって彼の解放の神学をさらに豊かなものとしていった。やがてボフは、共同体を訪れ、励ますことによって、今度は逆にBCCのさらなる成長を助けていくことになる。

『ニューヨーカー』(*The New Yorker*)誌(1987年3月2日付)のジェーン・クラメール(Jane Kramer)は、ブラジルの民衆教会共同体についてまとめたリポートにおいて、「それらのほとんどは『政治的』である。ただし、それは、彼らの取り組んでいる雇用、土地、住宅といった問題が、それ自体『政治的』問題であるからに過ぎない」と伝えている。

解放の神学がブラジルにおいて強力な勢力を誇るに至った理由の一つは、1964年の軍隊のクーデターである。このクーデターはその後、21年間にもおよぶ腐敗した独裁的支配とその目にあまる人権侵害をもたらした。伝統的に中産階級に属し、保守的なカトリック教会の指導者層の多くは、最初はこのクーデターを支援していた。ところが、自分たちよりも過激な司教、司祭たちが、左翼ゲリラに対する政府の軍事弾圧によって迫害されていることを知ったとき、彼らはもはや軍事政権への支持を公言することはできなかった。こうした状況については、1989年11月、政府軍兵士によって虐殺されたエルサルバドルの6名のイエズス会神父の状況を考え合わせると、よく理解することができる(ジョン・ソプリノ著、拙訳『エルサルバドルの殉教者—ラテン・アメリカ変革の解放の神学』柘植書房、1992年

を参照のこと)。

1960年代の終りまで、ブラジル教会とその司教団は、軍事政権を批判する中心的な声であり、労働者のストライキや労働組合をも支援してきた。

軍事政権が、ブラジルが世界 15～18 位の工業国に発展したことを、「経済の奇跡」と称しておごっていたとき、ブラジル教会司教委員会は、「富がごく少数の支配者に集中され、反面、大多数のブラジル人は経済的にさらに悪くなっている」と指摘し、政権を厳しく非難した。

1970年代、政府の軍事弾圧強化と、これに対する民衆側の過激な抵抗という両極化がさらに加速化していく中で、ますます多くの司祭、修道女そしてカトリック信徒が、抑圧されている多くの貧しい人びととの連帯のためにゲリラになっていった。

独裁政治の最後の 15 年間、500 人以上もの行動派カトリック信者が逮捕された。この他、政府の公式記録には残されていない、数多くの人びとが拷問にかけられ、虐殺されている。前述のジェーン・クラメールは『ニューヨーカー』誌の社説で次のように詳しく述べている。「この地の司教たちは、彼らの教区の司祭や修道女を保護しようとしてきた。しかし、1970 年代後半をすぎると、ブラジルの司教たちは自らの身の安全を図らなければならなかった。なぜなら、彼らは既に民衆の教会に関係していたからだ」。

レオナルド・ボフの著作が十分に理解されるようになるということは、それを読んだ人びとが、こうした経済的搾取と政治的抑圧の背景にあるものに、真っ向から対決することである。

ボフの著書は、ラテンアメリカの神学に最も求められることとは、今この現場で苦しんでいる大多数の貧しい人びとが現在、緊急に必要としていることを、真実に基づいて正確に伝えることであると述べている。

V. レオナルド・ボフの業績

ボフの著書は当初、ブラジルのフランシスコ会出版、ボゼス (Vozes) によってポルトガル語で出版された。ここでは入手が比較的容易な英訳された本に絞って紹介したい。

1) 英語に翻訳された最初の本は『解放者イエス・キリスト』(*Jesus Christ Liberator*)である。版元のオルビス (Orbis) 出版社は、1978 年、同書の出版にあたって、「この書物は、われわれの時代に対する一つの批判的キリスト

論である」と紹介している。この著書は、解放の神学の中で、キリスト論を体系的に扱った最初の著作である。

『クリスチャン・センチュリー』(*The Christian Century*)誌(1978年11月1日号)の書評で、リチャード・ケベドックス(Richard Quebedeaux)は同書を「創造的で力強い聖書解釈」と指摘している。『テヤード・レビュー』(*Teilhard Review*)誌(1980年夏季号)で、アンソニー・ダイソン(Anthony Dyson)は同書について、「現代世界において、特に物質的繁栄・豊かさと快楽を享受している国々において、個人も組織も、回心と生活の刷新をしなければならないとする神学的かつ、人間的挑戦である」と述べている。

英語版の序章で、ボフは、「原版の出版当時、ブラジルにはびこっていた厳しい政治的抑圧のために、自分が実際に書きたかったことのすべてを伝えることができなかった」と述べている。彼は英語版の序章に、ラテンアメリカの現状に関する明確な論述を挿入している。それによると、ラテンアメリカの貧困とは単に、その土地固有の経済問題ではなく、発展途上国の経済構造と関係している。そしてそれはさらに現存する神学的そして政治的姿勢によって増強されている、と彼は述べている。

2) 英訳された二番目の作品は、『解放する恵み』(*Liberating Grace*)(オルビス出版社、1979年)である。『セオロジー・トゥデー』(*Theology Today*)誌(1981年秋期号)掲載の記事で、エーリッヒ・シュロフナー(Erich Schrofer)は、経験と恵みの関係に関するボフの見解を、カール・ラーナーの見解と比較した。それによると、ラーナーが恵みを個人的なものとして強調しているのに対し、ボフは、恵みは歴史と社会に明らかにされている共同的な経験として理解される必要のあることを、聖書に基づいて強調している。この点でボフは彼の指導者カール・ラーナーを越えている。

次の3冊の英訳書は、いずれも、従来は緊張・対立関係にあると考えられていた二つのテーマを、実は一つのものであると論証する手法で書かれている。

3) 『十字架の道、正義の道』(*Way of Cross, Way of Justice*)(オルビス出版社、1980年)では、ボフは社会正義を達成するために闘っている現代のラテンアメリカのキリスト教徒の道は、キリストの十字架の道にほかならないことを述べている。

4) 『聖フランシスコ人解放のモデル』(*Saint Francis: A Model*

for the Human Liberation)(クロスロード出版社, 1982年, 石井健吾訳, エンデルレ書店, 1985年)では、ボフは現代の問題に対する関わりの道しるべとして、フランシスコ会創立当時の、聖フランシスコとその同僚たちの生活を取り上げて、聖フランシスコの急進主義と権威に対する彼の従順の間に、そしてまた、彼の貧しい人びとへの関わり方と教会権威への忠誠心の間に、緊張関係はなかったと述べている。

5)『主の祈り』(*The Lord's Prayer*)(オルビス出版社, 1983年, 拙訳, 教文館, 1991年)では、ボフはキリスト教徒の解放は、ただ単に個人の精神的王国の出来事に限られるべきではないということを、主の祈りに照らして、その一つ一つの願いに沿って論証している。

6)『教会の生成：基礎共同体が教会を再生させる』(*Ecclesiogenesis : The Base Communities Reinvent the Church*)(オルビス出版社, 1986年)については、『カナディアン・カトリック紀要』(*Canadian Catholic Review*)(1987年4月号)の中で、ノーマン・キング(Norman King)が次のように述べている。「この書物は、価値ある神学的歩みであり、基礎共同体の指導者による問題点の明確化の挑戦であり、さらに私たち自身の立場、位置づけを明確にさせるものである」。

ボフはこの著書の中で、草の根のキリスト教基礎共同体(BCC)の一つ一つの細胞が、祈り、聖書研究、そして社会活動にいかに関心し、そして民主的に取り組んでいるかを述べている。キリスト教徒による積極的な社会的行動の必要性だけでなく、女性の司祭叙階などについても述べている。

7)『教会・カリスマと権力』(*Church, Charism and Power*)(クロスロード出版社, 1985年, 石井健吾他訳, エンデルレ書店, 1986年)は、ボフの著作の中で最も議論を引き起こしたものである。「誰もボフほどに、カトリック教会の非常に権威ある構造を攻撃したものはいなかった」とクロスロード出版社は紹介している。

事実、本書の副題は「闘争的教会論」という、きわめて論争的なものとなっている。彼は本書に、マルクス主義による資本主義批判を取り入れている。彼は「キリストの聖なる力」を取り上げるためには、教会制度のヒエラルキー(位階制度)が明らかにされる必要があることを強調する。伝統的ヒエラルキー構造は、支配者階級を正当化する社会と同じ体質をもっている。こうした支配階級の正当化によって、労働を搾取されて苦しんでい

る貧しい人びとは、革命的教会によって支援された「階級意識」を発展させるべきであると議論している。

ボフは教会内の人権侵害に一章をさいている。そして彼は「権力の集中」をテーマにし、教会制度には支配者階級の体質のあることについて論述する。

聖霊はヒエラルキーだけに存在するのではなく、全キリスト共同体に存在する。従って、基本的に聖霊と復活したキリストからもたらされた力に依拠することによって、教会はもっと民主的な構造となる—というのが、ボフの描いている教会論である。彼の描く教会は、単に教義(ドグマ)や儀式典礼に安住する権威主義的なものではなく、順応性に富み、変化に対して柔軟なものである。

VI. 筆者の、解放の神学との出会い

最終章では、ボフの著書『教会・カリスマと権力』ゆえに、バチカン教理省との間に緊張が起こったその内容について述べるが、その前に筆者自身の解放の神学との出会いについて若干述べてみたい。

筆者は、1982年～83年3月の1年間、アメリカで在外研究していたが、その折、イエズス会の各大学付修道院の図書室で見つけたボフの、特に最初に紹介した2冊の本が、筆者がラテンアメリカの解放の神学に目を開くきっかけを作ってくれた。

解放の神学に対する関心について今少し詳しく述べると、次の通りである。筆者は1960年代はじめから、東南アジア諸国民衆と日本の経済活動との関係について関心をもち、研究・調査活動をして現在に至っている。1972年より特にマルコス戒厳令下のフィリピン民衆との連帯をもち続けている。

その当時、既に抑圧されているフィリピンの民衆の間では、解放の神学とBCCが実践されていた。筆者としては、書物ではなく、キリスト者の実践の場の体験から、キリスト教基礎共同体の意義を理解した。それを基礎とし、前述の通り、米国滞在中に、解放の神学に関するほとんどの書物を読むことができた。

帰国後間もなく、これほどまでに価値のある解放の神学、第三世界民衆の解放の支えとなるBCCが、バチカン教理省によって消極的にしかとら

えられていないことが、1984年の第一番目の指針によって明らかになった。しかも、この指針がマスコミ報道では意図的にわい曲され、ラテンアメリカをはじめとする第三世界の抑圧されている人びと、そして彼らと連帯している解放の神学が、日本の教会内にさえある、意図的誤解ゆえに不利を蒙っている事実遭遇した。

ちょうどその折に、日本の報道陣に対して解放の神学を正しく紹介してほしい旨、日本の司教団の依頼を受けた。その目的で資料を作り、紹介を続けていく中で、若干の書物にもなり、1984年から現在に至るまで、第三世界民衆に大きな力、勇気、光を与えている解放の神学を紹介し続けている。

Ⅶ. レオナルド・ボフの苦悩と評価

ボフがバチカン教理省から審問を受けるに至った経緯は、次の通りである。まず、『教会・カリスマと権力』が出版された1981年に、前述のリオデジャネイロ教区の大司教エウジェニオ・サレス枢機卿がボフを教区で審問した。さらに、ボフの「プロテスタント主義」の問題について、バチカンに注意を促した。

1984年5月、バチカン教理省のラッツィンガー（Joseph Ratzinger）枢機卿から、彼の著書『教会・カリスマと権力』の内容に関連し、特に教会の構造、位階制度（ヒエラルキー）の権威、教義と啓示について質問する書簡がボフのもとに届いた。これらの疑問点について議論するためにバチカンから「招待」されたボフは、彼の立場を支援するブラジルのアルンス（Evaristo Arns）、ローシャイダ（Aloísio Lorscheider）両枢機卿と共に「自費」でバチカンに出かけた。

1984年9月7日、ボフは4時間にわたりラッツィンガーならびにバチカン教理省の数名と「会談」した。ちなみに、以前ボフがカール・ラーナーのもとで博士論文を書いていた時、当時のラッツィンガーはむしろ非常に進歩的な神学教授としてボフを支援していた。この両者の会談の合同声明の中で、両者は、この会議を「兄弟的なものであった」と述べている。この会談の3日前に、教理省による36頁にのぼる文書『解放の神学の一側面に関する指針』が出された。その内容は、解放の神学の一部が信仰の霊的側面をうすめ、政治的側面だけに目的を限定し、社会問題の解決のために、

十分に批判的方法を用いないまま、マルクス主義の分析を用いている、さらに教会の位階制度的構造に挑戦しているとして、こうした傾向は、危険であると注意を喚起している。同時に、ラテンアメリカにおける政治的、経済的に抑圧的な制度に対しても、この『指針』は非常に強い調子で非難している。

ボフと彼の兄弟クロードビス(Clodovis:彼も解放の神学者である)との共著『解放の神学:対話から対決へ』(*Liberation Theology: from Dialogue to Confrontation*)は、バチカン当局に対する非常に強い公けの返答である。解放は本来行動であり、単なる学問的な論考ではないにもかかわらず、ただ単に考え方の議論だけに終始するバチカン当局の姿勢は、彼には耐えられないことを述べている。ボフは自らを擁護することに雄弁であり、バチカン教理省の文書の判断が、解放の神学を自らの利権を守るために意図的に陥れようとする権力者側からの一方的情報だけにに基づいていること、ラテンアメリカの教会と何らの相談もないまま、またこの地の人びとの現実の理解、認識もないまま、ただヨーロッパのものの見方、視点だけで解放の神学を片づけてしまっていること、貧しい人びとに対する従来通りの、当局の家父長的態度が結果として、ラテンアメリカの人びとを「従属」の位置に追いやり続けていること、などを厳しく批判している。かつて、G. グティエレスがボフと同じように、バチカンから攻撃の標的となった際、その徹底的調査を依頼されたカール・ラーナーはグティエレスの業績すべてを調査したあとで送ったバチカンへの報告の結論で、次のように結んでいる。これは彼の死の直前(1984年3月)の、遺言とも言うべき言葉である。「私たちは、私たちの小市民的な裕福な環境からして、解放の神学者たちを中傷してもよいのでしょうか。海の向こうのラテンアメリカでは、解放の神学の判決は、現実には彼ら神学者たちに対する死刑判決であり得るのです。...私たちは私たちの僅かな施しと立派な神学の勧告を第三世界に輸出してはならず、むしろ第三世界から学ぶべき時がそろそろ来ています」。

さらにボフは、解放の神学の中身を、ビンのコルクを抜いて味わおうともせず、単にビンの外側のレッテルだけで判断しているバチカン当局の姿勢と、マルクス主義についての浅薄なとらえ方に対しても、鋭く非難している。この地域においては、貧困をつくり出し、永續させている構造その

ものの不正、「構造的罪」（現教皇が自ら、その回勅『真の開発とは』において、ラテンアメリカで生まれたこの言葉を引用している）を正確に認識しなければならない。そのためには、マルクス主義的分析は一つの有効で、重要な道具、「隅の親石」であると、ボフは結論づけている。

ラッツィンガーと相対立していることが公けになるに至って、逆にボフは自分の修道院に静かに留まることを許されなくなった。種々の大学や、労働者、農民の集会に、またブラジルのテレビやラジオへの出演も要請された。また欧米の諸大学からも次々と講演依頼を受けているが、ボフはブラジルに留まることを選んだ。ブラジルにおいて今や、彼は何千万人もの人びとから英雄とみなされている。

1985年3月、「あなたの著書は、伝統的権威の受容と信仰にとって危険なものである」というバチカン教理省からの通告が、ボフのもとに届いた。ボフは「自らの神学を一人で歩むよりも、教会と共に歩むことを望む」と言って、この通告を静かに受けとめた。しかし同時に、自らの神学探求は今後とも続けると言っている。同年5月、バチカンはボフに対して、公けの講話、会議への出席、執筆を、さらに編集者となることも慎しむ、「償いの沈黙」を守るよう命じた。これはボフが「教義的過ち」を犯したからであり、しばらくの沈黙の期間をもって、「真剣な反省」をするためであると、バチカンは説明している。

ボフはこの命令を受け入れたが、ブラジルの10名の司教は、直ちに反対の声明に署名してバチカンに送り届けた。10近いブラジルの市は、ボフに名誉市民の称号を授与した。

このようにして、バチカン当局からのボフに対する残酷な仕打ちは、彼を一層世界的に有名な者とし、かえってボフとその解放の神学に対する支援を何倍にも増やす結果を生み出した。この沈黙の期間が一体、いつまでなのか、については正式には知らされていなかった。非公式には1986年5月までの1年間とみなされていたが、実際には1ヶ月早く、1986年4月に禁止命令が解除された。それは、ブラジルの21名の長老司教が教皇ヨハネ・パウロ2世と会見した2週間後であり、『キリスト教的自由と解放』というバチカン教理省の2番目の指針が出る1週間前のことであった。この文書は、「社会の政治・経済的営みは、教会の役割の範囲を越えるもの」と言いながらも、前回の文書と比し、解放の神学に対する批判は弱まり、む

しろ積極的な評価もみられる。例えば、キリスト教基礎共同体(BCC)を神学的準備不足と批判するよりも、「教会のために非常に大きな希望の源」として評価している。また、社会正義の源泉として、皮肉なことにボフ自身の語句である「全面的な解放」(integral liberation)という用語を承認し、使用している。

この新しい『指針』は、全般に解放の神学に対して積極的支援を与えており、建設的な文書である。当初は第三世界の状況においてのみ価値のあった解放の神学が、この文書により世界にとって普遍的な価値あるものとして評価されたことに対して、ボフはバチカン当局に謝意を表してさえいる。ちなみに、同時期に、現教皇はブラジルの司教団に「解放の神学と BCC は今や、第三世界に限らず、世界の全教会に対して大きな貢献を果たしている」という書簡を送り届けている。

おわりに

レオナルド・ボフの英語版の著書には、さらに二冊ある。一つは、『キリストの受難、世界の受難』(*Passion of Christ, Passion of the World*) (オルビス出版社, 1987 年)であり、今一つは、『三位一体と社会』(*Trinity and Society*) (オルビス出版社, 1988 年)である。

ボフは今、兄弟のクロードビス (マリアのしもべ修道会司祭 = Servants of Mary Order) との共著で、ラテンアメリカの民衆が簡単に読める分かりやすい本を書いている。その一冊は、信徒がどのようにして共同体をつかっていくかという指導書であり、今一つは、奴隷、インディオ、貧しい人びとの視座からの、もう一つのブラジルの歴史に関する本である。

この小論で紹介したボフのほとんどの書物を読み進めていくにつれ、彼の霊的深さに筆者は感銘をおぼえざるをえない。彼のすべての著書を心の糧、精神的なよりどころとして、つまり霊的読書として、読者にお薦めしたい。特に、今紹介した *Trinity and Society* はじめ、ボフの業績紹介の章で紹介した最初の 2 冊の本 (*Jesus Christ Liberator, Liberating Grace*) を薦めたい。

ボフの業績を紹介する、この小論の最後に彼の心優しさを垣間見ることのできる小さな逸話を紹介したい。ボフの著書『主の祈り』を訳し終え、教文館から出版の運びとなった少し前に、彼に手紙を書き、日本の読者へ

のメッセージと彼の略歴を依頼した。多忙なボフのことゆえ、このように唐突な勝手な願いを出したことをむしろ恐縮し、返事は半ばあきらめていた。ところが、思いがけなく、非常に早く、しかも丁寧な返事が届いた。この『主の祈り』の「日本の読者へのメッセージ」の中に、彼の優しさにじみ出ているので、教文館の承諾のもとに、ここに紹介させていただいて、この小論の結びとしたい。

日本の皆さまへのメッセージ

ブラジルには日本人の2世、3世がたくさん居ます。私の妹は日系2世と結婚し、3人の混血の子供が居ます。ブラジルでは、日本人の子孫たちはみな勤勉で新しい生活状況に積極的に適応していくというよい評価を得ています。私個人として日本の禅、仏教に対して強い興味を持っています。そこには西洋のギリシャ的人間観よりも、総合的で精神的な人間像がみられます。日本の文化の精神的エネルギーから私たちは多くのことを学ぶことができます。

アッシジの聖フランシスコについて本を書きました時、私は彼の優しさとしなやかさを強調しました。その時、日本の哲学についてよく考えました。日本の哲学には非常に繊細な感覚、優しさとしなやかさ、一貫性が見事に調和していると思います。私の考えでは、日本が私たちに教えてくれるいま一つのことは、科学的精神と大自然の調和との統合、人間の努力と神の恵みとの統合であります。

キリストと日本文化の出会いによって、日本の先達の霊性につねに伴っていた洞察がいつそう深まっていくことでありましょう。この出会いのために、私のこの本が少しでもお役に立つことができれば、これ以上の幸いはありません。

どうか日本の皆さまの上に、神様の恵み、祝福が豊かにありますように。

ブラジル、ペトロポリスにて

レオナルド・ボフ

1990年5月3日

(筆者は上智大学社会正義研究所員、経済学部経営学科教授)

The Role of the Theology of Liberation in the Modern World

— The Contribution of Leonardo Boff —

Keizō Yamada

SUMMARY

On the occasion of the publication of a new Congregation Document “Instruction on Christian Freedom and Liberation,” Pope John Paul II sent the letter to the Bishops Conference of Brazil encouraging the contribution of the Theology of Liberation to the World as well as to Latin America.

This was just at that time that the Vatican lifted the ban of “penitential silence” on Boff one month sooner than expected, in April 1986.

The document describes the Basic Christian Communities (BCC), for example, as “a source of great hope for the church,” and it approved of “integral liberation” (ironically, one of Boff’s own phrases) in the cause of social justice.

The new Instruction was generally seen as a conciliatory document, and Boff was grateful to the Vatican for giving universal significance to values that initially were only those of the Third World.

I have already introduced Liberation Theologians like Gustavo Gutiérrez and Jon Sobrino. Here I would like to present the contribution of Leonardo Boff in the following order.

- I . The Career of Leonardo Boff
- II . The Situation of Brazil
- III . The Background of the Theology of Liberation
- IV . The Contribution of the Theology of Liberation in Latin America
- V . The Contribution of Leonardo Boff
- VI . The Encounter of the Author with the Theology of Liberation

VII. The Suffering and Good Reputation of Leonardo Boff

On this occasion, I would like to introduce Leonardo Boff's books which were translated into English as relevant spiritual readings, as follows:

1. Jesus Christ Liberator
2. Liberating Grace
3. Way of Cross, Way of Justice
4. Saint Francis: A Model for Human Liberation
5. The Lord's Prayer
6. EcclesioGenesis: The Base Communities Reinvent the Church
7. Church, Charism and Power
8. Passion of Christ, Passion of the World
9. Trinity and Society